

て、ひとつづきの問題として考察の対象としたことは、竹村さんによる重要な問題提起といえるだろう。「暴力」の問題が、竹村さんにとって、このように一般に考えられるような現実の世界と、理論的な境界の攪乱という一見観念的な領域とを、繋ぐ形で問題化されたのは、映像や文学に関する斉藤綾子さんと越智博美さんの書評が明らかにしたように、竹村さんの理論が常に表象を通して思考され、具体的な感覚や感情に結びついており、何よりもその理論とそれを語る言葉が単に空虚な観念ではなく、文字通り身を切るような具体性を持って捉えられていたからに他ならないともいえるだろう。

第二回のF-GENSシンポジウムでも竹村さんは『『美とエロティシズムと死』の領有——2つの三島映画（2009）と憲法改正』と題した発表で、表象分析を通して純愛プロットによる死の領有がはらむ政治的意味を論じ、さらに第四回では「人間と非人間——死をめぐる（バイオ）ポリティクス」と題して再びアガンベン思想に踏み込んで、人間と非人間の境界の液状化と暴力をめぐる議論を深めてゆくことになる。こうした彼女の発言の記録は上に挙げたCOEの出版物に残されているので詳細は省くが、このように見てゆくと、COEでの竹村さんの活動は、彼女のこの上なく希有な思想の展開を示す貴重な軌跡でもあったことがわかる。

『F-GENS ジャーナル』を手にとり、2004年当時のシンポジウムにおける竹村さんの発表に対する私自身のコメントを振り返ると、明らかに当時において、竹村さんの問題意識を的確に受け止めてそれを深めることはできていない。しかし、現在に至って、彼女の問題提起が私の中に深い痕跡をもたらして、折々に呼びかけ、その後の考察を促していることに気付かされる。おそらく、竹村さん自身やその言葉に触れた者達の多くが、様々な形で、多かれ少なかれ彼女から何かを受け取り、背中を押されてきたに違いない。その言葉を受けとめて、さらに語り続けること、それこそが、現在の状況の中で、生命をつなぐ手立てに他ならないだろう。

竹村和子さんとジェンダー研究センター

館 かおる

竹村和子さんが、ジェンダー研究センターと深く関わった時期は、彼女が、魅力的で緻密なアメリカ文学研究者から、鋭利な表象研究者、そして稀代のフェミニズム批評理論家として大きな変貌を遂げて行く、そのプロセスと重なると言っても過言ではない。

竹村さんは、1996年4月にお茶の水女子大学に赴任した。お茶の水女子大学のジェンダー研究センター（以下IGSと略）は、1975年に女性文化資料館として創設され、10年ごとの時限付き施設だったので、1986年に女性文化研究センターに改組し、そして1996年に再改組したところだった。まさにその直後に、竹村さんが私たちの前に現れたことは、何という幸運だったかと今にして思う。その頃の竹村さんは、まだフェミニズムを全面に掲げていなかったが、1年も経たないうちに、もはや躊躇することは何もないという勢いで、IGSの活動に参加し、研究協力員や研究員として研究プロジェクトを推進し、2000年4月からIGSの運営委員となり、21世紀COE「ジェンダー研究のフロンティア」（F-GENS）が終了する2008年3月まで、様々なかたちで成果をもたらした。また、IGSに、研究機関研究員、研究支援推進員という、研究員と研究補佐の技官のポストが付いたことも、センターの活動を支える大きな力となったが、竹村さんは英文科のポスドク院生にこのポストへの応募を促し、彼女らはIGSの活動の中で力をつけ、女性学やジェンダー研究に造詣の深い英米文学研究者として就職していった。

1996年当時のIGSの専任教員は、女性文化研究センター時代に引き続き、原ひろ子教授と私の二人のみであったが、日本における女性学・ジェンダー研究を国際的なレベルに確立するために、海外の優れた研究者を招聘する外国人客員研究員（教授）制度が認められたこともあり、意気軒昂であった。外国人客員研究員の滞在期間は、3ヶ月から最長1年間であり、フェミニズム、ジェンダー研究を精力的に進めている招聘者選びにつき、竹村さんは熱心に相談に乗ってくれた。そして1998年度は、トリン・T・ミンハの招聘とセミナーの開催が実現した。竹村さんは、トリンの『女性・ネイティヴ・他者——ポストコロニアリズムとフェミニズム』（岩波書店、1995、2011年新版刊）を翻訳刊行したばかりであり、当時IGSの国内客員研究員であった早稲田大学教授の小林富久子さんもトリンの『月が赤く満ちる時——ジェンダー・表象・文化の政治学』（みすず書房、1996年）を刊行する直前であった。トリンは、1998年5月初めから8月末まで滞在し、夜間セミナーは、"Naming, Informing, Narrating: Identities across Difference"（名づけること、告げること、語ること——差異を横断するアイデンティティ）と題され、彼女が制作した映画を視聴して、講義を聞くスタイルを取り、聴衆を魅了した。1998年7月4日の公開講演会は、"Boundary Event: Color, Interval, and Multiplicity in the Visual Field"（境界上の出来事——視覚領域における色彩、間隙、多層性）と題された。真夏の、冷房設備がない、250人満員の教室にもかかわらず、トリンは講演を中断したくないと言って休憩もとらず、汗も拭わず、凝縮した密度の濃い語りを繰り広げた。「時の密度」を寺の鐘の響きの伝播により語ったトリンの言葉と共に、その時の感覚は今でも思い起こすことができる。トリンは、その頃、女性学、文学理論、哲学、人類学、社会学、映画理論など、様々な既存の学問分野を横断し、自明のものとされてきたそれらの学問の前提を根底から問い直す作業を行っていると言われていたが、当時、東京工業大学から単位互換制度を活用して大学院の私のゼミに参加していた院生が、トリンの講演を聞き、量子力学の「励起」を説く鍵になると興奮していたことが記憶に残っている。また、トリンが、日本での映画制作の際に、釘を一本も使っていない苔むした日本の寺を撮りたいというので、竹村さんと手分けして探したこともあった。トリンに向き合いながら、竹村さんも高揚していた。その時に制作した映画、The Fourth Dimension (2001 on Japan) は、再びトリンを招聘した21世紀COE開始期の2003年10月6日に、講演会に先立ち上映された。

1999年3月、竹村さんは、ジュディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル』（青土社、1999年）を翻訳刊行した。それは、彼女の母の不慮の事故による急逝直後のことだった。バトラーの言う「Agency エイジェンシー」を「行為体」、「Performativity パフォーマティヴィティ」を「行為遂行性」と翻訳した、その核心をついた概念把握は、その後、日本の思想界、言論界、学界に見事に定着した。『ジェンダー・トラブル』の副題「フェミニズムとアイデンティティの攪乱」の「Subversion 攪乱」と共に、「行為体」及び「行為遂行性」は、学生や研究者たちの論文に頻繁に登場するようになり、その多大な影響力を示すものとなった。『ジェンダー・トラブル』の刊行とその反響の大きさは、当時の彼女を支える力となったと思う。祖母、母、彼女と3代の女たちが紡いできた時空を突然奪われた、その深い悲しみの中で、彼女は、博士論文となった『愛について——アイデンティティと欲望の政治学』（岩波書店）を2002年に刊行した。同書の「序」には、「勤務校のお茶の水女子大学にジェンダー研究センターが設置されており、活発に活動していること、そしてジェンダー関連の研究や教育が学部、大学院をつうじて大学の中で支援をえて、ごく普通に進められていることも、有形無形にわたしの研究を支えてくれていると思う。研究は一人の人間の思索だけではなく、それを支持してくれるさまざまなサポートな

しには生まれえないものだと、あらためて実感した。」と記されていた。

2000年には、イヴ・セジウィック (Eve Sedgwick) を招聘し、IGSと英文科とが共催して講演会を行った。1997年頃だったか、竹村さんの研究室に行った時、セジウィックの*Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire* 1985 (『男同士の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会、2001年) を手に取り、このホモソーシャルの概念に触発され、彼女の観点からのセクシュアリティの構造を語ることができると述べていた時の表情は、実に生き生きとしていた。セジウィックの講演英文原稿は、『ジェンダー研究』(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター編・刊) 第4号に、和訳は竹村和子・大橋洋一共訳「クィア理論をとらえて考える」と題し『現代思想』2000年12月号に掲載された。

このように、トリン、バトラー、セジウィック等に対峙した竹村さんは、彼女のフェミニズム批評理論の幅を広げ、深めていったと思う。

一方で、竹村さんは、IGSが招聘した、少し分野を異にする外国人客員教授の夜間セミナーや講演会のコメンテーターとしても活躍した。2000年度に招聘した タニ・E・バーロウ (Tani E. Barlow) の夜間セミナー「(インター) ナショナルフェミニズムと中国」の「零度の歴史」のコメンテーターを務め、その後展開した論考、タニ・バーロウ／竹村和子「歴史と文学との邂逅——学問分析と研究実践をめぐる対話」が『現代思想』29巻第6号 (2001) に収録されている。

その他にも、IGSが招聘して開催するセミナーや公開講演会には、ディスカッサント、コメンテーター、司会としても関わった。2002年3月2日、オーストラリアのヴェラ・マッキー (Vera Mackie) のシンポジウム「トランス・ナショナルフェミニズムの可能性」、2003年には、台湾の何春蕤による「東アジアにおけるフェミニズムとジェンダー／セクシュアリティ理論の課題」(後に何春蕤著、館かおる・平野恵子編『「性／別」攪乱——台湾における性政治』御茶の水書房、2013年に収録)、2004年度は、IGSに赴任した河野貴代美さんと共に、アメリカのローダ・ケスラー・アンガー (Rhoda Kesler Unger) による「ジェンダーの社会構築——フェミニズムの視点による実証心理学」のセミナー運営に携わった。

2004年から国立大学が法人化されるにあたり、お茶の水女子大学は、ジェンダー研究の推進とその教育体制の確立を目指し、21世紀COEプログラムを申請することになった。原ひろ子後任の伊藤りさんも加わり、私たちはその申請書づくりに邁進し、2003年に採択された。2003年度以降は、竹村さんは、F-GENS の事業推進担当者、プロジェクトD「理論構築と文化表象」及び「文化表象のデータベース作成」担当責任者として目覚ましい活動を展開したことは、天野知香さんの記述にある通りである。私もF-GENSの事務局長を務めながら、プロジェクトCや連携研究の担当責任者として多忙を極めていた。FGENSに参加した教員も学生も、重労働の毎日に疲れていたが、意欲に溢れていた。

21世紀COEが終了した2008年7月には、竹村さんの科研費プロジェクト「暴力と主体構築」とIGSと共催で、「レイ・チョウ (Rey Chow) コロキウム」を開催した (講演原稿は『ジェンダー研究』第12号に収録)。

こうして振り返ってみると、竹村さんにとって、21世紀COEで招聘したバトラー、スピヴァクたちほか、多くの研究者との交流が、彼女の理論をより明晰な、豊かなものに築き上げることに繋がったことは確かである。また、彼女らと交わす息詰まる議論のあとの、竹村さんのチャームングでコミカルなまでの言動は、一層の親愛を深めるものであった。

彼女は、常に全力疾走しながら、理論を形づくる研究者であった。そして、いささか早く、現世での彼女の疾走を終えてしまった。しかし、彼女が魅かれ、病の床で眺めていた絵に描かれた山脈の向こうで、なおも疾走しているような気がしてならない。

(あまの・ちか／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授
たち・かおる／お茶の水女子大学ジェンダーセンター教授)



1998年6月3日 トリン・ミンハ教授夜間セミナー



2000年11月8日 タニ・バーロウ教授夜間セミナー



2004年12月11日 F-GENS 全体シンポジウム



2006年1月15日 F-GENS
ジュディス・バトラー教授セミナー



2008年5月16日 ゼミ生とともに